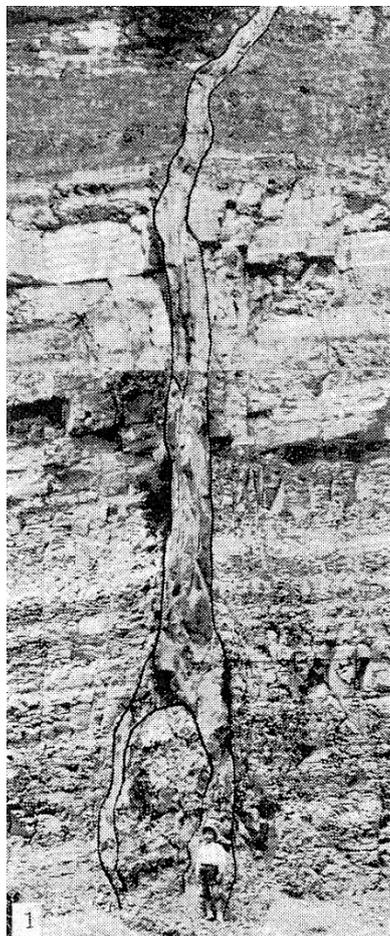


新生代新第三紀中新統のもろざき師崎層群中には多くの砂岩脈が見られます。



小佐の砂岩脈

上左：林（1957）より 上中：1967年撮影 上右：1980年撮影

下中：2007年撮影 下右：2021年撮影

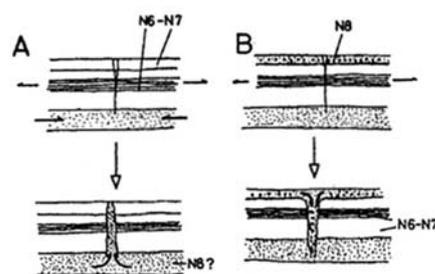
乙方の砂岩脈（下左：1967年撮影）

碎屑性岩脈は日本では新第三紀層に多く見られ、師崎層群からは10数脈が報告されています（林，1957）。その中で最も立派なものは小佐東南にある露頭です。残念ながらほとんど保護されることなく放置されたため、2025年現在では草木に覆われ、観察することも、接することも困難な状態が続いています。上に筆者が1960年代以

降に撮影したものの一部を紹介します。林（1957）によれば、走向 N40° E でほとんど直立し、路面から約 18m 伸び、上部にいくにしたがって尖滅しています。かつての路面付近に径 2.5m のコンクリーションを含んでいたようです。岩脈の走向が豊浜向斜の軸部に位置し、それに直交していることから、この向斜の形成に関連してできた岩脈と考えられています（林, 1987）。小佐の岩脈は、上方から注入されたという考えと下方から注入されたという考えがあります。林（1987）は下位の砂岩層から、大江（1990）は浮遊性有孔虫化石から小佐岩脈は周囲の岩石より新しく、砂岩脈の構造からも下方から注入した岩脈としています。一方、大信田ら（2018）はやはり浮遊性有孔虫化石年代から、小佐の砂岩脈は上位の若い堆積物が下位の古い地層中に注入してできたと考えています。



point 小佐（国土地理院地図に加筆）



砂岩脈の形成 2 説

（名古屋大学実習用プリント）



小佐のカニ石（尾張名所図会）



岩脈中の有孔虫などの化石



チタスナモグリの化石

この砂岩脈は、豊浜層中に見られ、非常に多くの有孔虫や放散虫などの化石を含むことで知られています。岩脈から産出する浮遊性有孔虫から、堆積当時は亜熱帯から熱帯の表層水塊の影響が及ぶ海域だったと考えられています。また、母岩の地層からはチタスナモグリ *Callianopsis titaensis* (Nagao, 1941) (= *Callianassa shikamai Imaizumi*, 1957) の化石が豊富に産し、尾張名所図会にも「蟹石」として描かれています。

参考文献

- 林 唯一, 1957, 知多半島の中新統中の砂岩岩脈. 愛知学芸大研究紀要 69-76.
 林 唯一, 1987, 知多半島の中新統師崎層群の堆積時造構造運動. 地学雑, 96 (5), 278-293.
 大江文雄, 1990. 知多半島先端を構成する中新統師崎層群豊浜累層からの有孔虫・貝形類化石. 愛知県教育センター研究紀要理科特集, (26) : 55-68.
 大江文雄, 1991. 知多半島先端を構成する中新統師崎層群豊浜累層から産する蟹だま石の教材化. 愛知県教育センター研究紀要理科特集, (27) : 61-74.
 大信田彦磨・近藤幸実・林 広樹・星 博幸, 2018, 愛知県知多半島, 中新統師崎層群に見られる小佐岩脈（碎屑岩脈）の浮遊性有孔虫化石. 豊橋市自然史博物館研報, (28), 1-9.
 村松憲一, 2019, 愛知県の地質とジオサイト 第二版. 190 p.

【村松憲一】